

慈 恵 人

第 4 回



東京慈恵会医科大学附属第三病院
糖尿病・代謝・内分泌内科 診療部長

藤本 啓 Kei Fujimoto

Profile 東京慈恵会医科大学卒業
東京慈恵会医科大学 内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌内科 准教授
【所属団体・資格】日本内科学会、日本糖尿病学会 関東甲信越支部幹事、日本内分泌学会、日本専門医機構、日本医師会、
臨床糖尿病支援ネットワーク 理事、日本臨床栄養学会、日本栄養・食糧学会、東京都難病指定医、デジタル推進委員、TeamSTEPPS 認定トレーナー、
International Journal of Diabetes Research、International Journal of Clinical Investigation and Case Reports

自己紹介 ～self-introduction～

令和3年度(2021年度)より東京慈恵会医科大学附属第三病院糖尿病・代謝・内分泌内科 診療部長を務めております藤本 啓と申します。私は、長年にわたり糖尿病の研究、教育および治療に携わってきました。この領域における最新の知見や治療法を取り入れ、患者さん一人一人に最適な医療を提供することを心がけています。また、チーム医療の重要性を強く認識し、医療スタッフとの連携を深め、患者さんにとって安心できる環境を整えていきたいと考えております。患者さんの健康を第一に考え、糖尿病治療における新たなアプローチを模索し続けます。皆様のご協力をいただきながら、地域医療に貢献できるよう努めて参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

信念 ～belief～

Listen to your patient, he is telling you the diagnosis.

患者さんの心の声に耳を傾ける

私ども東京慈恵会医科大学 内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌内科は1964年に創設され、「病気を診ずして病人を診よ」の精神のもと、先輩から私達へとそのバトンが脈々と受け継がれております。私の信念は、「Listen to your patient, he is telling you the diagnosis.」です。患者さんの心の声に耳を傾け、診療後に元気になって帰宅できるように努めております。

糖尿病は、身体的な健康のみならず、精神的、社会的な側面にも大きな影響を及ぼす病気です。したがって、私ども医療従事者は、血糖値の管理を超えた包括的なアプローチをもって、患者さん一人一人と向き合うことが求められます。

患者さんが自らの状態を理解し、自己管理の重要性を認識することが非常に重要だと考えています。そのため、医療提供者として情報提供を行い、教育と支援を通じて患者さんが自立できるようサポートすることが私たちの役割だと思っています。患者さんが自らの健康に主体的に関わることで、より良い治療結果を得ることができると信じております。

糖尿病治療には個性が不可欠です。人それぞれ異なるライフスタイルや背景に応じて、治療計画を柔軟に調整することが重要です。これからも患者さんとの信頼関係を築き、一緒に最適な治療戦略を考え、実行していくことを大切に参ります。



第三病院



東京慈恵会医科大学
糖尿病・代謝・内分泌内科

このコーナーでは、慈恵大学の4つの附属病院で活躍されている教職員を「慈恵人」として紹介します。

第4回は、第三病院（東京都柏江市）の糖尿病・代謝・内分泌内科、藤本啓診療部長をご紹介します。藤本先生に現在第三病院糖尿病・代謝・内分泌内科で取り組まれていることや、ご自身が「慈恵人」として日頃から患者さんに対して心がけていることなどを伺いました。

■ 附属第三病院 糖尿病・代謝・内分泌内科の特徴

附属第三病院の糖尿病・代謝・内分泌内科では、チーム医療を基盤に、患者さん一人一人の生活に寄り添ったきめ細やかな医療を提供しております。特に、糖尿病患者さんへのケアには以下の取り組みを重点的に行っております。

①糖尿病患者会「いずみ会」でスタッフや仲間との支えあいができる

「いずみ会」は、患者さんだけでなく、ご家族や糖尿病に関心のある方ならどなたでもご入会いただけます。年に3回開催される患者会（外来糖尿病教室）では、管理栄養士による食事療法の解説や、医師による糖尿病に関する講義など、幅広いテーマをわかりやすくお届けしています。また、会員の皆さまはJADEC（日本糖尿病協会）主催のイベントに参加できるほか、協会発行の専門誌「月刊糖尿病ライフ さかえ」を購読することが可能です。

②糖尿病メディカルスタッフミーティングで医療の地域連携を図る

地域の糖尿病対策に向けた医療連携を強化するため、医師（かかりつけ医を含む）、看護部、薬剤部、栄養部、検査部をはじめとするメディカルスタッフが年3回の定期ミーティングを開催しております。うち1回は総会とし、地域の専門家をお招きして特別講演を実施しています。毎回、約40名の医療スタッフが参加し、地域医療の発展に向けた意見交換や情報共有を行っております。

③糖尿病教育入院と糖尿病教室

糖尿病教育入院の利点は、患者さんが糖尿病の理解や治療、そして合併症の進行度を短期間で集中的に学べる点です。入院期間中には、各部署が平日ごとに担当し、約1時間の糖尿病教室を実施しています（図参照）。また、より効果的な教育入院を実現するため、糖尿病治療に携わるメディカルスタッフが2週間に1度、定期的にミーティングを行い、最適なケアの提供に向けた話し合いを続けています。

糖尿病教室スケジュール			
曜日	時間	内容	担当
月	15 時 (45 分)	糖尿病の薬物療法	薬剤部
	14 時半 (60 分)	糖尿病と合併症	医師
火	15 時半 (40 分)	糖尿病と検査	検査部
	15 時 (60 分)	糖尿病の食事療法	栄養部
水	15 時 (45 分)	日常生活について	病棟看護部
金	15 時 (45 分)	フットケア	外来看護部



開催場所:5 階 健康情報室
東京慈恵会医科大学附属第三病院
栄養部・薬剤部・看護部・中央検査部
糖尿病・代謝・内分泌内科

TEAM JIKEI

～全ては患者さんのために～

病院を支えるコメディカルの紹介(栄養サポート編)

病院を支える医師以外の職種(コメディカル)について、ご紹介するコーナーです。

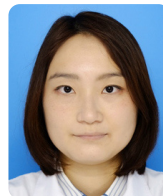
第3回の今回は、栄養部の業務をご紹介します。

栄養部の業務は、給食管理と臨床栄養管理となります。

給食では、入院中の唯一の楽しみである食事を通じて病態の改善・治療・QOLの向上を目指しています。

臨床栄養では、管理栄養士の病棟配置やチーム医療への参画、栄養指導など実施して、健康回復をサポートしています。

病棟配置



附属病院(本院)
管理栄養士

相澤 はるか
Haruka Aizawa



附属病院(本院)
栄養部

●管理栄養士の病棟配置について

本院では患者さんの状態に応じたきめ細かな栄養管理を行うために、2022年10月から管理栄養士が14H病棟に常駐しています。入院時には食物アレルギーや食べられないものはないか、入院前の食欲や食量、体重減少がないかをお伺いし、病院食にてご対応します。化学療法や術後で食欲がない患者さんには食べやすいものへの変更や食形態の変更、栄養剤の調整などを行います。退院前には必要時に栄養指導も行います。

食事のことでお困りのことがございましたら、お気軽にご相談ください。

栄養指導



第三病院
管理栄養士

中山 美和
Miwa Nakayama



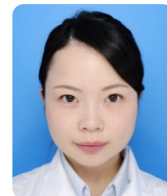
第三病院
栄養部

●栄養指導について

栄養食事指導は入院および外来の患者さんに対し、栄養状態や生活習慣の改善を通して、疾病の早期治療に貢献することを目指して実施しております。食習慣、ライフスタイルに合わせた食事改善の方法を患者さんと相談しながらご提案していきます。食事療養は継続が大切です。美味しく食べて、楽しい毎日を過ごせるようサポートいたします。

栄養指導は医師の指示が必要となりますので、ご希望される場合には医師へお伝えください。

NST



葛飾医療センター
管理栄養士

平岩 さなえ
Sanae Hiraiwa



葛飾医療センター
栄養部

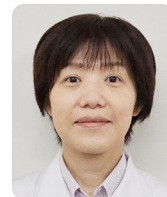
●NST(Nutrition Support Team)のご紹介

当院の栄養サポートチームは毎週火曜日に回診・カンファレンスを行っています。栄養状態に課題のある患者さんに対し、最適な栄養支援を行うため医師・看護師・薬剤師・臨床検査技師・言語聴覚士・管理栄養士などのスタッフが相互に連携し、それぞれの知識や技術を持ち寄ります。

●患者さんへのメッセージ

入院中の栄養管理は口から食べる食事だけではなく、口から十分に食べられない場合や、消化管が使えない病態まで多岐に渡ります。今後も個々の患者さんに適切な栄養管理ができるようチームで活動していきたいと思ひます。

ICU(早期栄養介入管理)



柏病院
管理栄養士

山本 恵美
Emi Yamamoto



柏病院
栄養部

●集中治療を受けている方の栄養

私達は、怪我や病気で集中治療室に入っている患者さんに携わっています。ここではお食事を摂ることが難しい重症の方が大半です。可能な限り早く栄養を摂ることは大切ですが、体の状態が短期間で変化する場合も多く、その時の状況に応じて点滴や栄養剤で体に必要な水分、電解質や栄養を摂ることができるよう医師、看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、臨床工学技士など様々なスタッフと専門性をいかして患者さんと向き合っています。



Vol.4 論より証拠

明治18年4月14日、東京大学(東大)講堂は「脚気菌」発見の大講演会があるというので熱気にあふれていた。緒方正規(東大教授)が脚気病の原因菌を発見したというのである。大学教授、助教授、陸海軍軍医官、文部書記官、有名開業医ら大勢は、この脚気細菌説に大きな期待をよせて参集していた。とくに脚気菌の発見を待ち望んでいた陸軍軍医官の喜びようは大変なものであった。当時の軍隊は5人に2人は脚気患者だといわれるほど脚気の蔓延に困っていたのである。

一方、以前から脚気栄養説をとんでいた高木兼寛(海軍軍医、本学創設者)は、すでに脚気の原因として栄養のアンバランス(白米に偏りすぎることを考え、その改善(白米を麦に代えること)によって脚気病の予防、治療に成功しつつあった。そしてこの栄養説の成果が出るにつれて、緒方らはこれを黙視することができず、原因菌をもとめて研究をすすめた結果、ついに「脚気菌」を発見したというのである。だからこの発見こそは東大陸軍グループが長いあいだ待ち望んでいた大ヒットであった。

講演会の状況から察して、これはもう学術の発表会というよりは、むしろ緒方正規の顕彰会に近いものであった。ライバルになった兼寛にも発言が許されたが、それは緒方の決定的な栄養説批判に対して兼寛がどのように反論するかという興味の対象にすぎなかった。壇上に立った兼寛は、しかし、自分の栄養説を簡単に説明したのち、敢然とこう述べたのである。「日常の開業医が脚気菌を見つけるのに顕微鏡を携えて往診するのはいかにも大変であろう。しかもそれで脚気菌が見つかったとしても、その菌を撲滅できない以上、結局この説では脚気病は治せないのではないか」と。普通の反論のしかたとは違って、如何にも実学主義者らしい反論であった。普通であれば、相手の不合理な点を指摘し、自分の合理性を主張するものであるが、彼はそのような理屈は言おうとせず、簡潔に、「自分は簡単に脚気を診断できるし、また自分の改善食(麦飯)でそれを完全に治すこともできる。しかし君たちの学説では結局この病気は治せないではないか」と



言っているのである。ここに「理屈よりも実際」「論より証拠」という彼の実学的な学問観、医学観がはっきり示されているのである。

幸い、この脚気細菌説は、しばらくして北里柴三郎によってその実験の不備が指摘され、おのずと消えてしまったのであるが(脚気菌は誰にも追試、確認できない幻だったのである)、それでも東大陸軍グループは、まだ兼寛の栄養説をただちに認めようとはせず、のみならずこの学説で脚気患者が激減したという確かな事実さえも否定し続けたのであった。そして結局この論争の決着は日清、日露の両戦争まで待たねばならなかった(明治28年、38年)。兵食を麦飯に改めていた海軍からは、この戦争で一人の脚気患者も出さなかったのに、相変わらず白米食を続けていた陸軍からは膨大な数の脚気患者(約30万)と死亡者(約3万)を出したのである。兼寛の栄養説の勝利は誰の目にも明らかであった。

日露戦争勝利の翌明治39年、兼寛は母校セント・トーマス病院医学校(英国)に招かれて特別講演をおこなった。彼はそれまでの脚気研究の経過を、栄養の改善のことから脚気を完全に予防できたことまでを3日間にわたって事細かに話した。著名な医学雑誌ランセットがその全文を掲載したため、欧米の医学者はこの兼寛の先駆的業績に大きい衝撃を受けた。とくに栄養説の正しさを、単なる考えとしてではなく、現実の成果として示したことが極めて高く評価されたのである(ここでも「論より証拠」が評価されたのである)。

南極大陸の地名に「Takaki Promontory 高木岬」というのがあるが、これは英国の南極地名委員会が昭和39年に高木兼寛の名前をとって命名したものである。西欧の医学者にあたえた影響がいかに大きかったかが分かるのである。「高木岬」一帯の地名には「ホブキンス氷河」「エイクマン岬」「フンク氷河」など国際的に高名なビタミン学者数名の名前がつけられている。兼寛の業績はビタミン発見の先駆になったのである。

写真：母校セント・トーマス病院医学校で特別講演をする高木兼寛(明治39年) 出典：法人広報誌「The JIKEI」第5号

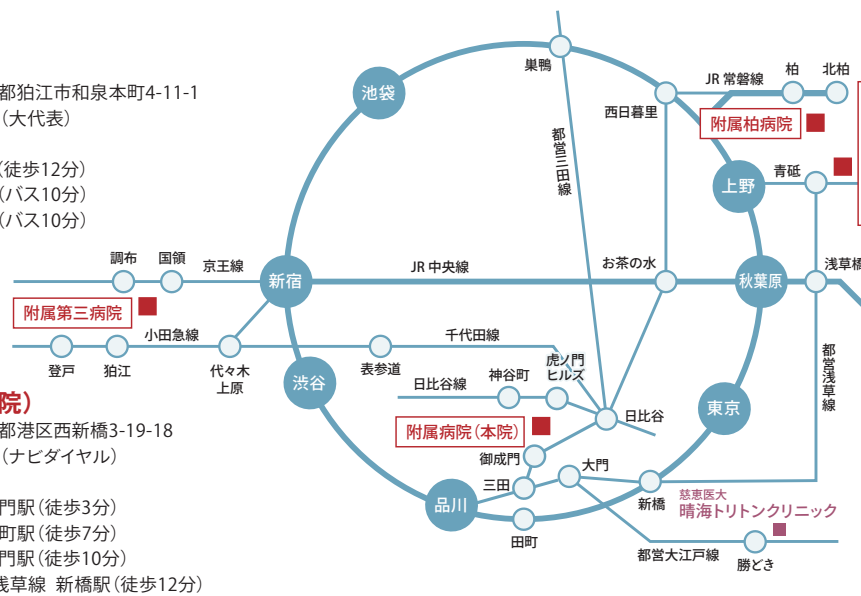
Access

第三病院

〒201-8601 東京都狛江市和泉本町4-11-1
☎03-3480-1151(大代表)
Access
京王線 国領駅(徒歩12分)
京王線 調布駅(バス10分)
小田急線 狛江駅(バス10分)

附属病院(本院)

〒105-8471 東京都港区西新橋3-19-18
☎0570-03-2222(ナビダイヤル)
Access
都営三田線 御成門駅(徒歩3分)
日比谷線 神谷町駅(徒歩7分)
銀座線 虎ノ門駅(徒歩10分)
JR・銀座線・都営浅草線 新橋駅(徒歩12分)



柏病院

〒277-8567 千葉県柏市柏下163番地1
☎04-7164-1111(大代表)
Access
JR常磐線 北柏駅
(徒歩10分/バス5分/タクシー5分)
JR常磐線 柏駅
(徒歩25分/バス15分/タクシー10分)

葛飾医療センター

〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2
☎03-3603-2111(大代表)
Access
京成線 青砥駅
(徒歩10分/バス6分/タクシー5分)
JR常磐線 亀有駅
(バス10分/タクシー5分)

東京慈恵会医科大学 4附属病院広報誌

よつば

第5号



広報誌「よつば」について

東京慈恵会医科大学は4つの附属病院を有しています。「四つ葉のクローバー」のように4病院が有機的につながり合い、力を合わせ、患者さんを中心とした医療を実践していくという思いを込め、誌名としました。

Contents

第4回

慈恵人

第三病院

糖尿病・代謝・内分泌内科 診療部長

藤本 啓

● TEAM JIKEI
～全ては患者さんのために～
病院を支えるコメディカルの紹介(栄養部編)

● Jikei History Vol.4
評伝 学祖 高木兼寛
― 論より証拠 ―